「クリミア半島、歴史の旅」『清淵』二〇一四年八月

上野俊彦

クリミアは、面積二万五五〇〇平方キロメートル、日本の四国よりひとまわり大きい半島である。本稿執筆時の二〇一四年五月、このクリミアの帰属がロシア・ウクライナ間の係争問題となっている。ことの起こりは、二〇一三年十一月、ヤヌコヴィッチ・ウクライナ大統領（当時）がＥＵ連合協定調印を凍結したことだった。連合協定調印がただちにＥＵ加盟につながるわけではなかったが、調印凍結はＥＵ加盟を望む親西欧派を失望させ、反政府運動が激化することとなった。反政府運動の中心は過激なウクライナ民族主義勢力（以下、過激派）で、二〇一四年二月十八日には首都キエフで治安部隊との大規模な衝突が起き、七十五名以上の犠牲者を出すに至った。その結果、同二十一日にＥＵの仲介でヤヌコヴィッチ政権と野党は、大統領選挙繰り上げ実施と挙国一致政府樹立で合意した。しかし過激派はこれを拒否し、大統領即時退陣を要求して武力闘争を継続、二十三日に大統領が逃亡して、ヤヌコヴィチ政権は崩壊した。その後に成立した暫定政権は、ロシア語を第二公用語として認めないなどロシア系住民の権利を制限する政策を打ち出したため、こんどは暫定政府とロシア系住民との対立が始まった。こうした状況の中、二〇一四年三月十六日、ロシア語を母語とする住民が七七パーセントを占めるクリミアで住民投票がおこなわれ、投票率八二パーセント、ロシアへの編入賛成が九六パーセントという結果となり、同十八日、ロシアとの併合条約が調印、同二十一日にはロシアの国内法的手続が完了して、クリミアは再びロシア領となった。いま、「再び」と書いたのは、ロシア人にとって、クリミアは、一七八三年にオスマン帝国の支配下にあったクリム・ハーン国がロシア帝国に併合されて以来、ずっとロシア帝国領であり、その後はソ連領、つまり自国の領土だったからである。ロシア人にとって、クリミアが外国の領土だったのは、ソ連解体後の一九九二年からの二二年間のことに過ぎない。

しかし、クリミアの歴史は、ロシアの歴史よりもはるかに長く、二五〇〇年前、半島南部に古代ギリシアの植民都市ケルソネス（ロシア語でヘルソネス）が築かれたことに始まる。ケルソネス遺跡は、二〇一三年に世界遺産に登録された。ギリシア様式の白い石柱が黒海の青さに映えて美しい（写真1）。ケルソネスは軍港の町セヴァストーポリの近郊にある。セヴァストーポリ観光とあわせてぜひ訪れたい。

歴史はくだって、一五世紀からはクリム・ハーン国の時代となる。ハーンの宮殿は、かつての都バフチサライに今も残る（写真2）。一五三二年に建設された宮殿は一七八三年の

クリム・ハーン国のロシアへの併合に際して被害を受けたが、のちに修復され、現在は博物館となっている。トルコ風のエキゾチックな宮殿が往時を偲ばせる。この宮殿は、ロシアの詩人プーシキンが「バフチサライの泉」に詠んだ噴水「涙の泉」があることでも知られる。「涙の泉」は大理石でつくられた壁面の棚状の突起から水滴がぽたりぽたりと涙のように落ちるだけのものだが、プーシキンの詩によって、ハーンが愛妾の死を悲しんでつくらせたとの物語が広まり、バレエ作品にもなったことで一躍有名になった。旅はときに人の心を感傷的にする。詩人プーシキンならずとも、遠くクリミアの空の下、異国情緒たっぷりのハーンの宮殿で、旅人は愛する人を失ったハーンの悲しみをしばし共有することとなる。

ハーンの宮殿からさらに山深く入ったところに、岩窟につくられた聖ウスペンスキー修道院がある。そもそもキリスト教の修道制は三世紀エジプトが起源とされ、四世紀にはトルコのカッパドキアで共住制修道院の基礎が築かれ、六世紀にはシナイ半島の聖カテリナ修道院、ギリシア北部アトス山の修道院群などが成立したが、いずれも人里離れた山間僻地や絶壁上にある。バフチサライの聖ウスペンスキー修道院もその一つである。とはいえ、現存する修道院は、クリミアが再びキリスト教世界にもどった一八世紀以降のものであろうから、ロシアおよびウクライナに現存する洞窟修道院としては、一一世紀半ばに建設されたキエフ洞窟修道院のほうが古いことになる。

バフチサライの聖ウスペンスキー「岩窟」修道院の奥に、さらに興味深い場所がある。岩山の上に広がる洞窟都市「チュフト・カレ」である。ペルーのマチュピチュの標高を低くし周囲の山を平坦にしたような感じの遺跡である。「チュフト・カレ」の起源は五世紀にまで遡るが、イスラム寺院の跡などもあるので一八世紀頃までは人が住んでいたようだ。

クリミアがロシア人にとって馴染みの観光地となったのは、クリミア南部のヤルタが保養地として発展した一九世紀以降のことである。クリミア半島は北部から中部にかけて比較的平坦で、半島南部の海岸線に沿って険しい山岳地帯がある。内陸部にあるクリミアの中心都市シンフェローポリから海岸沿いのヤルタまでは鉄道がなく、峠越えの道路が通じている。ヤルタは文豪チェーホフの作家活動の拠点となり、チェーホフとおぼしき主人公と人妻との不倫を描いた小説『犬を連れた婦人』の舞台となっていることでも知られるが、ルーズヴェルト、チャーチル、スターリンという、米英ソ三国首脳が第二次世界大戦の戦後処理を話し合ったヤルタ会談がおこなわれた場所としても知られる。

ヤルタは、海岸近くまで険しい山が迫るところに、わずかに谷川沿いに開けた狭い土地に発達した町で、東京近くで言えば温泉こそないが湯河原や熱海といった風情で、山の急斜面にまで住宅やホテルがびっしり立っている。近郊の山の斜面にはブドウが植えられている。クリミアはワインの産地である。クリミア・ワインと言えば、マスカット種のブドウからつくられる甘口の白ワイン、中でも、アレクサンドル三世の治世一八八二年に建設されたマサンドラ宮殿のワイナリーにちなむ、マサンドラ・ブランドの白ワインが有名だ。

ヤルタ会談のメイン会場は、白亜のリヴァディア宮殿であった（写真3）。この宮殿は、最後の皇帝ニコライ二世のために第一次世界大戦開戦直前の一九一一年に建設されたネオクラシカル様式の近代的な建物である。リヴァディア宮殿は、足が不自由で移動が困難だったルーズヴェルトのために宿舎としても利用された。他方、チャーチルの宿舎は、一八四六年に完成したヴォロンツォーフ伯爵の別荘、アループカ宮殿だった。そのアループカ宮殿とリヴァディア宮殿とをつなぐ海岸沿いの一本道の途中に立つユス

ポフ公の別荘、ユスポフ宮殿がスターリンの宿舎だった。ルーズヴェルトとチャーチルが相談のために互いの使者を往復させるのをスターリンが監視するためだったと言われる。今はいずれの宮殿も観光地となっている。

ヤルタ会談は一九四五年二月初めに開かれている。保養地とはいえ、ヤルタの緯度は北海道北端に相当する。記録によれば、シンフェローポリ北方の町、サキの飛行場に着陸した一行は、雪の中を車で一〇〇数十キロ走ってヤルタに到着している。凍てついた道路の両側に一定間隔で立っていた護衛の兵士は老人と子どもばかりだったという。ドイツ軍の占領から解放された直後のクリミアには、もうまともな兵士はほとんど残っていなかったのだ。スターリンは、戦災で荒れ果てたクリミアをルーズヴェルトに見せ、米国が切望するソ連の対日参戦がいかに高くつくかを示したかったのだろう。かくしてルーズヴェルトは、千島列島をソ連にプレゼントすることでようやくスターリンから対日参戦を引き出したのである。